農は国の本なり。
その姿を立体的に
示すことを通じて
保守思想を語る。

「農」を語る

荒谷 卓×小野耕資

第❷回 稲作に込められた先祖の知恵



あるがままの自然を崇める生き方

小野▼荒谷先生が「熊野飛鳥むすびの里」で取り組んでおられる在所共同体の考え方の中には、自分たちは共同体の仲間だということを示すうえでの信仰、つまり宗教の問題もあるように思います。例えば、日本では各地域に社があり、人々が集う道標となるような場所がありますが、こうした点についてはいかがでしょうか。

荒谷▼「惟神（かんながら）の道」という言葉があるように、日本は縄文時代からずっと神々と暮らす生活ぶりというものが続いています。惟神の道とは、あるがままの宇宙、あるがままの地球、あるがままの自然を認めて、その中で生きていこうという決意のことなんです。そのときに、人間は宇宙全体、あるいは自然全体を知り得るかというと、もちろん知り得ないですよね。けれども、あるものはあるわけです。言い換えれば惟神の道とは、人間が知り得ないものであっても、「あるものはある」と認めて生きていくことを覚悟するということです。日本人が「言上げ」しないのは、言語化できないものはそのままにしておくという感覚的認識からきているように思います。

人間が小集落で生きていくうえで最も大きな影響を与えるのは住み着いた土地であり、日本人はそれぞれの土地と一体化していくことを選んだのだと思います。それが人類最古の土着文化を生んだのであり、そして土地というものが持つ、言語化できないエネルギーのようなものを産土神（うぶすなのかみ）としてお祀りしたわけです。土地によってエネルギーや性質は違うので、それぞれの集落ごとに産土神様がいらっしゃって、その神様とともに生きていくという暮らし方を日本人は選び取ったのだと思います。

宗教や科学というのは言語化できるものですが、それは日本人からすると買い被りだと思います。人間は宇宙の歴史も知り得ないし、それどころか地球のことも生命のこともよく知らないはずなのに、それを言語化した分だけしか信じないという態度は、日本人的感覚からすると狭隘な感じがします。間違っていないとしても、それはごく一部にしか過ぎないのではないかという感じがするんですよね。

日本人の場合、その土地の神様というあるがままの自然を崇めてともに生きていくということを大事にしてきたのだと思います。

小野▼まさにその土地の神様を中心に、集落の人があるがままに生きていくことが重要だということですね。例えば江戸時代は、神社などの倉（社倉）にお米や作物の余剰分を貯めておいて、危機になったら放出するということをやっていました。単純に貯めておいて必要になったら出すというだけのことですが、村の神社に貯めておくというのは神

様の恩寵のようなものを背景にした、当時の共同生活の主な特徴の一つだと思います。

荒谷▼社倉についてはまさにその通りだと思います。もう一つ、社倉そのものには危機になった時の備蓄ということ以上の役割がありました。毎年祈年祭で、「頑張ってお米を作ります」という誓いをして、できたお米を新嘗祭の時に奉納しますよね。残りのものは社倉に蓄えておくのですが、奉納するお米は一番良いものを納めるわけです。そこで何もなければ、翌年はその社倉から籾をそれぞれの百姓さんに配布して、それを苗床にして次の年の米を作っていきます。ということは、毎年一番良いお米の種を使って米作りができるということです。

つまり、日本人は社倉のある神社を中心にして、毎年最も良い種を皆に配布していたのであり、それによってどんどん米の質が上がっていったわけです。社倉にはそういう意味もあったのだと思います。



荒谷 卓（あらや・たかし）

昭和34年秋田県生まれ。東京理科大学卒業後、57年、陸上自衛隊入隊。陸上幕僚監部防衛部、防衛庁防衛政策局戦略研究室勤務の後、米国特殊作戦学校への留学を経て、帰国後に特殊作戦群初代群長となる。研究本部研究室長を最後に、平成20年退官。一等陸佐。21年、明治神宮武道場「至誠館」館長に就任。30年、国際共生創成協会「熊野飛鳥むすびの里」創設。農、武、学を通じて日本文化の国内外への普及活動に取り組む。令和4年、「日本自治集団」創設、代表に就任。著書に『戦う者たちへ』『サムライ精神を復活せよ!』『日本の戦闘者』『奪われた祖国を取り戻す』など。

小野▼なるほど。伊勢神宮でも半ば自給自足的な態度が取られていると言いますし、まさに地域ごとに収穫を感謝する祭りがあり、さらにその一番上に天皇陛下がやられる新嘗祭があるわけですよね。天皇になって最初のものは大嘗祭と言われますが、そういったものが今も引き継がれているというのは非常に大きいですね。日本にはそういう文化がまだ残っているということを感じます。

稲作と天皇の関係

荒谷▼日本のお米の歴史を神話的に遡れば、斎庭（ゆにわ）稲穂の御神勅というものがあります。天照大御神様が瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）に直接、「高天原に聞し召す斎庭の稲穂をあなたに任せますから、これを広めなさい」ということでいただいたのが始まりです。

この斎庭稲穂の神勅によって、日本国中で栽培される稲は、ことごとく「天照大御神からの授かりもの」という位置づけになります。私たち民は、その稲を栽培するわけです。そして私たちは、その稲から成るお米を日々いただきます。つまり、米作りは「神とその暮らしを、私たちが地上（日常）で、そのまま現そうと努力する」ことです。これが「随神の道」です。

また、米作りは「私たち一人一人の努力によって、この世を高天原（天国、極楽浄土）にする」ことなのです。これはとてもポジティブな生き方ですよね。死後に救済されたいとか天国へ行きたいということではなく、今生きている社会を自分たちの力で極楽浄土にしようということですから。だから、日本人にとってお米を作るというのはそういう意味が本来的にあるわけです。そして、天皇様のご使命は代々「しろしめす」ことですが、「おすくに（食国）しろしめす」という言い方をしますよね。つまり、お米を広めることとしろしめすこと、そして国民の気持ちを知って祈るということを一緒にされているわけで、それが尊いんです。ですから、日本人にとって稲作というのは単なる産業の一部ではないと理解していいのではないかと思います。

小野▼少しマニアックな話になるかもしれませんが、五・一五事件の理論的指導者と言われた権藤成卿は『自治民範』という本の中で「社稷」、つまり今日のお話でいえば在所共同体がまずあって、その上に天皇がいると論じました。ここでの天皇とは独裁的に支配するのではなく、伝統に則って範を示すやり方で統治する存在であり、それが古代の天皇の統治であると権藤は主張していました。

そういった世界観が戦前もありましたし、幕末に日本のことを考えた人も皆、そういう方向に行き着いた面があるように思います。

荒谷▼『古事記』の冒頭には、「祈る」「しろしめす」という天皇のお役目をもっと現実的な面でどのように解釈するかということが書かれています。つまり、廃れた昔の道徳を復旧させるとか、崩れた倫理観を立て直すのが天皇のお役目だというふうに古事記には書いているわけです。

実際に歴代の天皇の歴史を見ると、そういったことに非常に尽力されていることが分かります。当時は天皇であること自体、蘇我氏などに命を狙われるぐらいの危険なことであったにもかかわらず、私権力の増大や不平等な社会を阻止するために危機をもあえて引き受けて、都も飛鳥から難波に移して、とにかく社会を正そうとなさったわけです。そういうことが本来の天皇のご使命であろうかと思います。

小野▼権藤の世界観的にいえば、社会が堕落することもあるし、蘇我氏のような臣下が威張って社会が混沌としてくる時もあるけれども、ある時英邁な天皇やそれをお支えする臣下が突如として現れて、社会が再び原始的な理想に戻っていく。それがいわゆる「維新」「御一新」なのです。原点回帰に近い。そういったことは古代から何度も起こって、それが最もよく表れているのが大化の改新であるという発想に権藤は至っています。

荒谷▼農業に関していうと、二十六代の継体天皇が有名ですね。先帝である武烈天皇にはお世継ぎがなかったので、五代ほど遡って即位されました。継体天皇は、農と養蚕を進めるという詔を出されています。つまり、男子が農業をちゃんとしなければ皆が飢えてしまうし、女性が蚕の糸を紡がなければ寒くて凍えてしまうから、天皇が自ら農をやり、妃は自ら桑を刈って絹を織るということを詔されました。

だからこそ昭和天皇以降、今上陛下に至るまで田植えをされたり、后宮が蚕をされたりということを範としてなさっているわけです。

小野▼養蚕はその数代前の雄略天皇から開始されたという記述もあるようですが、いずれにせよ古代から現在に至るまで天皇は農の精神を重要視されていたということが重要ですね。



小野耕資（おの・こうすけ）

85年神奈川県生まれ。青山学院大学文学研究科博士前期課程修了（専攻日本近代史）。『維新と興亜』副編集長、大アジア研究会代表、崎門学研究会副代表、里見日本文化学研究所研究員、昭和維新顕彰財団評議員、大夢舘副舘主。著書に『資本主義の超克』（展転社）、『筆一本で権力と闘いつづけた男 陸羯南』（K&Kプレス）、『読んでおきたい日本の「宗教書」日本人の生き方を考える12冊』（合同会社宗教問題）、『柳田國男の名著を読む 変革と保守の民俗学』（彩流社）、『日本の根幹 農・神道・アジア』（反時代出版）ほか。

例えば、正倉院にある赤い布は、日本茜という草で染められたものです。この日本茜は、かつては日本各地に自生していましたが、現在ではほとんどなくなり、何と皇居内でかろうじて見つかり、上皇・上皇后両陛下の思し召しで栽培していると言います。またその布に使う絹（生糸）も、近年の蚕は品種改良が進み強く丈夫で糸も太いのですが、古代の形式ではありません。これも、皇室の紅葉山養蚕所で使われていた蚕の「小石丸」という品種が、古代の蚕から出る生糸の性質を非常に残しているのです。この「小石丸」は小型で生産性も低いので、近代品種へ置き換える案もあったようですが、上皇后陛下が「日本の純粋種と聞いており、繭の形が愛らしく糸が繊細でとても美しい。もうしばらく古いものを残しておきたいので小石丸を育てましょう」とおっしゃったので現在まで残っていると言います。

世界中の人々と手を携える

小野▼ところで、「熊野飛鳥むすびの里」には「国際共生創成協会」という名称も入っていますが、これに込められた意味をお伺いしてもよろしいでしょうか。

荒谷▼もちろん日本という国を立て直すことが目的ではありますが、これだけグローバル化していますから、日本だけが本来の姿に戻ったところで、世界が今のようなグロー

バル資本主義のままでは、とてもじゃないけれど生きていけませんよね。そういう意味で、世界の方たちにも我々の考えをちゃんと届けて理解してもらいたいということで、このような名称を付けています。

実は、僕は明治神宮にいた十年間、世界中の方々に武道を教えながらこのことについてずっと語り合っていました。そうすると、今の日本人よりも世界の人々のほうが八紘為宇や共助共生社会の考えを深く理解していて、人類はそうした道へと移行すべきだという考えをお持ちだということに気づいたんです。「日本は本来そういう国だったのだから、もっとリーダーシップを示したらいいじゃないか」というわけです。そういうふうに激励されまして、世界には我々の考えに賛同してくれる、あるいは協力してくれる人がたくさんいるのだなと思いました。

そこで、そういう人たちとも手を組んで、激烈な自由競争の社会ではなく世界レベルで共助共生できる社会を作っていこう、というふうに思うようになったわけです。「僕は日本でやるから、皆さんも頑張ってくださいね」ということでこの活動はスタートしました。

その後、コロナ騒動があって連絡が取りづらくなった時期もありましたが、今でも彼らとは連絡を取り合っています。つまり、世界の人たちと手を携えて社会を作っていこうとの思いから、「国際共生創成協会」という名称を付けたということです。

小野▼世間一般では「アンチグローバリズム」というと、自分たちの国に閉じこもりがちになるところもあるかと思いますが、荒谷先生はそうではなくて、むしろ世界に開かれるべきだという意識をお持ちだということですね。

世界の五大文明や神話は日本のものとは違いますが、例えば収穫に感謝するという面ではある程度共通していますし、新自由主義的なグローバリズムとは違う世界への広がり方を考えていく必要があると私も常々思っています。

荒谷▼まさに今、ＢＲＩＣＳとかグローバルサウスと言われている国々は具体的にそういう方向に動き出しているんです。日本のメディアはグローバル資本主義のプロパガンダしかしませんが、西ヨーロッパの人たちでさえも実際に会話をしてみるとグローバリゼーションの本質とは何か、ちゃんと理解しています。すでにグローバリゼーションは失敗したという認識に彼らは至っていて、だから自分たちで新しい社会を作っていくに際して、文化と経験知を持っている日本に期待している感じがしますね。

小野▼ＢＲＩＣＳの会議でも、グローバリズムの反省が議題に上がっていたことがあったと記憶しています。

荒谷▼ＢＲＩＣＳのそれぞれの国もそうですし、特にプー

チン大統領は「これから世界は多極化する」という言い方をしています。多極化というのはどういう意味かというと、それぞれの国や文明がそれぞれの文化、伝統を大切にし、互いに尊重し合うということでしょう。

逆にいうと、自分たちの独立した価値観、文化、伝統がなければ、次の新しい世界ではメンバーシップの資格さえ持てないのではないかと思います。そういう意味では、日本は本来、伝統文化という意味では世界の人たちに自信を持って発信できるものを持っているはずなので、そこをちゃんと自覚するということがとても大事だと思いますね。

円環的・螺旋的な時間を生きる

小野▼そうですね。もう一つお伺いしたかったのが時間軸の考え方についてです。哲学的な話かもしれませんが、西洋近代は直線的な時間を想定している一方で、農業や古代神話的な時間は円環しています。つまり、春が来て、夏が来て、秋が来て、冬が来て、また春に戻ってくるというような時間の考え方があります。保田與重郎の『絶対平和論』には、米作りを通して円環的な時間軸の中に生きることで、近代的な支配と欲望に蝕まれた生活から脱却し、争いが起こらなくなり、本当の平和が手に入るのだと述べています。

まさにそういうところがあると思うのですが、荒谷さんのお考えはいかがでしょうか。

荒谷▼特に西洋では、いろんな人が時間というものを哲学的大テーマとして扱っていますが、結局は理性、知識に依存している限りは直線的なんです。しかし、理性が拒絶する感性や経験というものがあり、日本人はまさにそちら側の立場ですよね。要するに、知識というものは限られている。そしてその知識を超える認識はどこから来るかというと、感性と体験しかないのだということです。

これが日本人的な捉え方で、感性と体験的な知恵というものが、先ほどおっしゃったような繰り返しの中にあるのだと思います。親が経験したことを子供も経験し、ご先祖様が経験したことを我々も経験するわけですから、ご先祖様や親の体験はよく聞いておいたほうがいいということです。人間は常に直線的に進歩するのではなく、同じことを繰り返しつつ、それが成長につながるのだとすれば、自分の体験だけではなく親の体験、祖先の体験というものをよく学んで、同じことが起きたら祖先の教訓をもとにより一歩進んだ答え、可能性を見出していこうという態度が大事だと思います。ですので、単純な円ではなく螺旋的に伸びていくと考えていいと思うんですね。

西洋近代の理性主義、ましてや共産主義や資本主義は、過去を否定する進歩主義の立場をとりますよね。だから祖先の学習を教訓化しないし、副作用があろうが良いと思えばすぐに注射だって打ってしまうわけです。そう考えると、進歩しているのではなく後退していますよね。そういう意味では、本当の進歩というのは知識だけではない感性や経験の積み重ねにあるということをよく理解して、同じ体験をしたら二度目はもっとマシなものにしていくということをしていかないと、人類の成長はないように思います。

小野▼そうですね。直線的な時間だとそこにいるのは自分だけになると思います。ですが円環的な、あるいは螺旋的な時間の場合、例えば先ほどお話に出たように先祖代々続く田んぼで去年作った良い米を種籾にしようという発想にもなるので、伝統というものの重さがかなり違ってきますよね。先祖からのしきたりのようなものが非常に重くなってくると思います。

荒谷▼伝統というと古いことだと思いがちで、特に進歩主義の人たちはそう断言しますが、実はそうではないんです。伝統というのはまさに経験の積み重ねのことですから、常に中身は進歩している。芸能にしても、昔の素材を使いながらも、祖先の経験にさらに新しい発見を乗せて、それをまた伝統として伝えていくわけですよね。ということは、伝統の内容自体は進化しているんです。

しかも、それは失敗も踏まえたかなり深みのある進化であり、薄っぺらいものではありません。本来の人類の進歩や進化、成長というのはそういうものだと思います。

社会性と土着性を取り戻す

小野▼最後に現代日本と農業に関して、荒谷先生の思いをまとめていただけたらと思います。

荒谷▼我々は大きな課題を背負っていまして、グローバル資本主義の下で、日本という国も、それから日本人一人ひとりも荒廃してしまっているので、それを立て直さないといけない。そのためにはもう一回社会性を取り戻さないといけないのですが、グローバル資本主義の原動力である人・物・金の流動性は、社会を解体する原理でもあります。流動化していると社会を形成できないので、土着性が必要になる。だから、土着性と社会性というのはある意味でワンセットです。そして土着性のある社会を運営していくためには、衣食住を他に依存しない自立が必ず必要になってきます。

そこで、農というものが自分たちの生業として不可欠なものになってくるんです。しかも、ただ食べ物を生産する

ということでなく、その中に先祖の知恵や教え、それから先祖が社会に込めた思いや価値観などを、稲作を通じて我々は再認識するべきではないかと思います。そこに新しい日本が誕生する可能性が生まれ、それがこれからの世界の新しい潮流につながっていくだろうという気がしています。

小野▼まさに日本人は米を作り続けてきたわけですが、前近代まで米というのは今以上に非常に重要なものでしたよね。通貨の役割も果たしていたぐらい重い意味を持っていましたし、現代においても、危機の時代の中で自分たちが生き延びていくための食料の生産という意味で重んじられています。また、単純に命をつなぐというだけでなく、共同体や仲間との助け合いという意味でも非常に重要だと思いました。本日はありがとうございました。